HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	月刊DRF 第12号
Author(s)	デジタルリポジトリ連合
Issue Date	2011-01-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/73497
Type	periodical
Note	事務局: 北海道大学附属図書館; http://drf.lib.hokudai.ac.jp/ で公開したもの
File Information	DRFmonthly_12.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

月刊 DRF
Digital Repository Federation Monthly

第12号
No. 12 January, 2011

[特集] 新生DRF一周年を迎えて

その他の記事
・参加レポート
・あなたのお仕事何ですか？

● 特集 新生DRF一周年を迎えて：DRF運営委員より

連

私立大学から参加している唯一の運営委員メンバーなので、私立大学の特色を生かした機関リポジトリをより広げていけるように活動を進めたい。そして機関リポジトリを中核とした多様な機関との連携をさらに推進していきたいと思っています。

慶應義塾大学
メディアセンター本部課長
入 江 伸

継

北海道DRF6から1年。改めてDRF Wikiを眺めて、参加機関の拡がり、多彩なイベント開催、豊富な情報提供に少し感動する。特に、発表者に新しい顔ぶれが目立つのが心強い。DRF6年目の活動も大学と学術図書館を巡る不安定な諸条件のもとに展開される。先が見え難い状況でこそ、大学図書館員の継続する力が問われる。

広島大学図書館副館長
石 井 道 悦

忍

新生DRF一周年に当たり選ぶ漢字は「忍」の一字である。以下は担当課長の語るに一任する。云々。…では、逸見館長と一心同体シンクロ率111%(当社比)の山本が続けます。一見、先行きは隘路険路の一路のようですが、忍び難きを忍びつつ、一升餅を背に進むはオープンアクセスの大道一筋、ひたひたと参る一心であります。皆様よろしくお願いいたします。

DRF運営委員長
北海道大学附属図書館長
逸 見 勝 亮

開

2011年、東北大学附属図書館は創立100周年を迎えます。学術情報流通改革の一環であるオープンアクセスの実現に向けて、引き続き東北大学機関リポジトリTOUR(ツアー)を充実させていきたいと思います。

東北大学附属図書館事務部長
片 山 俊 治

解

DRFの活動は平成18年から行われてきましたが、昨年規約を定めて「組織」的な体裁を整え、新たに発足しました。この間、実際に活動を運用する立場からは、幾つかの問題点が浮き彫りになってきたように思います。「解」くべき(悩ましい)問題というものは私生活でも職場でも図書館活動でもあらゆる所に存在するわけですが、こうした問題点を自主的かつ共同で「解」くことが大学図書館の「刷新」でもあるような活動がDRFの今後であればいいなと思っています。特に若い世代に期待。

金沢大学情報部情報企画課長
内 島 秀 樹

1st Anniversary

新生DRF、
おかげさまで一周年。

オープンアクセス、機関リポジトリ、そしてDRFにとって2011年はどんな年になるのでしょうか。DRF結成一周年を迎え、今回8名の運営委員にDRFや自機関のリポジトリについてそれぞれの思いを漢字一文字に託してもらいました。

普

つくばリポジトリの2011年のテーマは「普」です。収録コンテンツ数をさらに拡大し、大学が求める多様なニーズに応えていくためには、つくばリポジトリが学内構成員に広く普及し、身近な存在になることが必要不可欠だと考えています。

筑波大学附属図書館副館長
関 川 雅 彦

千

今年の漢字一文字は「千」。「千葉大」で「千と千尋」の主題歌のようにPRし、「千差万別」のデータ相手に「千載一遇」の機会を得るために「千変万化」の手段を使い、「一騎当千」の職員が「千思万考」の上「千波万波」の収集攻勢を行い、登録データが「千客万来」となる、そんなCURATORに私はなりたい。

千葉大学情報部学術情報課長
杉 山 宗 武

新

機関リポジトリが普及して5年ほどが経過し、さまざまな文献充実の工夫がこらされていますが、まだまだ未開拓、まだまだ新機軸が必要。Barrelでも今年また新しいことを何か試したいです。普通こういうことは少しは腹案と勝算のある人が言うことなんでしょうが、ザンネンなことに今のところなにもありません。これから考えます。DRFで一緒に考えましょう。

小樽商科大学学術情報課長
杉 田 茂 樹

●特集 新生DRF一周年を迎えて ： DRFアドバイザー・WG主査より

筑波大学大学院
図書館情報メディア
研究科 教授
逸 村 裕

DRFの活動を興味深くウォッチしています。
今日の日本のオープンアクセスと機関リポジトリの運動の一翼を担ってきたDRFの活動は特筆に値するものだと思います。
新生DRFもはや一周年。この種の活動が継続的に行なわれることはたいへんなことです。
関係者のなみなみならぬ努力があったことは承知していますし、今後の継続にあたってもまたいろんなことがあるでしょう。
「DRFなんて知らない」と言われたのは四年前のことでしたっけ？

この一年も機関リポジトリコミュニティは地道に拡大を続けてきました。この先になにがあるのか、他人ごとではなく、楽しみにしています。
（アドバイザー）

関西外国語大学
国際言語学部教授
平 元 健 史

■ 図書館の進展は機関リポジトリの基盤 ■
2011年元旦、列島は大晦日からの雪が降り積もった。積雪は大学図書館に山積する課題の量を連想させた。昨年末、一年を評して電子書籍元年とする論評が目についた。2009年のグーグル法定公告から火がつき、iPad発売により加速した私企業による電子書籍を巡っての論争の結果であった。この事態は、図書館が担ってきた公共値としての「知」の集積と体系化の役割を、今後どのように位置づけるかを、一層するどく問いかけた。
また、昨年来の国立大学図書館市場化問題は、その後、一部小規模図書館の部分業務委託に始まり、全面委託を計画している大学がでる状況となった。これを放置すると、やがて大規模大学にも拡がり、図書館職員の意欲は低下し、図書館サービスに留まらず学術環境の劣化に拍車がかかることになる。
大競争時代に入り、各大学図書館は蛸壺の中で課題解決にあたりがちである。しかし、図書館理念の根幹に関わる課題解決には、伝統ある図書館ネットワークによる検討と理論化、連携した対処を必要としている。
新ＤＲＦの活動は、行動的な新たな図書館ネットワークを形成し、活動的な図書館職員を育成した。オープン・アクセスの持続的発展のためには、大学図書館の役割や機能の再構築の線上に、機関リポジトリの進展を位置付け、ＤＲＦが作り出したエネルギーと人材を図書館事業の全ての局面に浸透・配置できればと願う次第である。
（アドバイザー）

大阪大学附属図書館
前 田 信 治

ひとも じ 近
2 0 1 1

DRF結成から１年経ちました。皆様の日頃のご精進に敬意を表し且つDRFへのご協力に心から感謝申し上げます。
新年の抱負は、より個々のDRF加盟機関さまにとって親しく近い活動を実施していくことをもって第一としたいと思っております。
この月刊DRFをはじめ、各種ワーキングではイベント開催やML・関連サイトでの回答など、積極的に加盟機関の皆様とつながろうと機会を提供しております。互いにそれに関わる、教えてもらう・あげる、手伝ってもらう・助ける、などの"かかわり"が濃厚にないというなら、私はそんなのイヤであります。
私自身、DRFによって言葉にできない程の恩恵を受けています。
私はDRFで初めて"チームで仕事する"、ということを学んだ気がします。いうまでもなくその契機はDRFの皆さんとの出会いであり、意識・価値観の共鳴の経験です。私はワーキングやまた自分自身のDRFの活動により、それを提示して行きたいと思います。
新年もどうぞよろしくお願い申し上げます。
（技術サポートワーキンググループ主査）

千葉大学文学部教授
竹 内 比 呂 也

我々の眼前にある大学図書館は現下の技術的、社会的状況の下で偶々そのような形をしているに過ぎず、それ自体を守ろうとすることにはあまり意味はない。図書館はその時代に即して変容すべきであり、またそうしなければ「記録された知識を新たな知識を生み出す上で不可欠なものとして永続的に利用できるように残していく」という普遍的な使命を果たしていくことはできないのである。機関リポジトリは、今日の社会的文脈のなかで大学図書館がどうしても取り組まなければならないことであり、その実施は学術情報流通の議論に一石を投じるとともに図書館の機能について再考する機会となった。その中から生まれたDRFがわが国の学術情報流通を草の根レベルで支える自発的組織として大きな役割を果たしているのは喜ばしいことである。しかしながら、今の我々にはその一時の成功を喜ぶ時間すら与えられていない。常に前へ、そして大学図書館の未来へ。
（アドバイザー）

北海道大学大学院
理学研究院数学部門
准教授
行 木 孝 夫

2003年にEPrints2.2.1を部門のプレプリントサーバに採用して以降、機関リポジトリをはじめとするデジタルリポジトリが相互にコンテンツを共有できるような環境を考えてきました。この間、CSIの始動やDRFの発展もあって機関リポジトリの普及は目覚ましいものがあります。今年はSWORDを本格運用しつつHUSCAPと北大数学のプレプリントサーバを連携していこうと思います。API等を通じて自動的なコンテンツ共有を追及できるところがデジタルリポジトリの特徴と言えます。この点はもっと強調されてよいのではないか、と感じています。
研究者の意識しないところで学術コミュニケーションの形態は静かに変わりつつあります。その担い手として極めて重要な位置にいる図書館は何を目指すのでしょうか。
（アドバイザー）

常磐大学
人間科学部 准教授
栗 山 正 光

新生DRF一周年おめでとうございます。私は名ばかりのアドバイザーで何の貢献もできませんでしたが、国内外で活発な活動が行われている様子を、メーリングリスト等を通して、頼もしく拝見しています。
さて、この一年を振り返ってDRFが何を持っているか、今日はっきりとわかりました。それは仲間です。
＃もはや使い古されたネタですかね(^^;)
（アドバイザー）

ひとも じ 結
2 0 1 1

広島大学図書館
尾 崎 文 代

「結」は、個人的に好きな漢字です。手を結ぶ、花を結ぶ、実を結ぶ、結束、結願…。
新生DRF一周年を迎え、「起承転結」でいえばまだ「起」か「承」か？という時期に、もう「結」なの？と言われそうですが、「結」（ゆい）には共同作業、相互扶助組織の意味があります。隣組、助け合い、そして、沖縄好きの私のイチ押し「ゆいまーる」。自発的な共同作業の積み重ねから末長く続くコミュニティを作り上げ、人生を活性化させる活動。…これって、地域共同リポジトリ(ShaRe)、延いてはDRFの精神そのものでは！？
（と昨年、一部で流行したキーワードでした。）
今年はこの「結」をベースに、もっと多くの手と手を結び、花を結び、そして実を結んでいきたいなあと思っています。今年もどうぞよろしくお願いします。
（企画ワーキンググループ主査）

●参加レポート 「機関リポジトリのアクセス数をいかに数えるか？～カウント方式の標準化に関する国際会議～」

－1月11日（火） 国立情報学研究所 『機関リポジトリアウトプット評価の標準化と高度化』ワークショップ

ROAT国際会議が1月１１日に開催されました。

ROAT (Repository Output Assessment Tool) プロジェクトでは、機関リポジトリのアクセスログを一定の基準で処理し評価指標となるデータを簡便に得ることができる環境を整えると共に、その基準の標準化について検討し、また標準化の国際連携についても計画を進めています。

今回の国際会議では、日本・ドイツ・フランスのプロジェクト担当者による最新動向の報告がされました。

開会挨拶
安達　淳氏
（国立情報学研究所）

討議 進行
竹内 比呂也氏
（千葉大学）

閉会挨拶
西村 靖敬氏
（千葉大学）

＜参加報告記＞

情報量が非常に多い会議で、IRにとどまらず、学術情報流通全体に係る内容でした。本学ではIR構築後、次はその評価が求められつつあります。OAの精神とIRの数値的な評価と両柱で、今後の学術情報流通がより発展していくのではと思いました。

本WSのURLはこちら

http://www.ll.chiba-u.ac.jp/~joho/CSI/20110111_WS.html

佐藤 義則氏
（東北学院大学）

『機関リポジトリ利用度分析の方法論上の争点：ROATプロジェクト報告』

機関から提供されたアクセスログを解析。ロボットによるアクセスは、機関リポジトリによってかなり状況が異なっているため全体の観測が必要。また、どういう人がどういう使い方をしたのかを知る手段として、IPアドレスに加えCookieによる識別も有効と言える。同一論文や同名の異なる著者へのアクセスを識別するために、何らかの仕組みが必要である。

ウルリッヒ・ハーブ氏
（ザールラント大学・ドイツ）

『リポジトリと相互運用可能な利用統計：ドイツおよび欧州における最新動向』

欧州では資金援助団体を通じた機関間の協力が活発である。OASプロジェクトでは、IRのコンテンツの利用数、引用状況を調べ、プロジェクトの参加機関はその結果を入手することができる。今後はアクセスログに関するプライバシーの問題解決や、他機関へのOASインフラの開放、国際的な協力などを考えている。

ヨアキム・シェプフェル氏
（リール第3大学・フランス）

『フランスにおけるオープン・アーカイブの展開と利用』

フランスでは、電子リソースの利用統計について研究する国家プロジェクトがある。2008年からリポジトリの利用統計も対象となった。これらの研究から研究者の行動を理解し、また大学が多額の費用を費やしている電子リソースの利用統計やその結果どのように配分するか等の監査も行った。今後は利用統計の最小要件を明確化する。

●参加レポート 「学術情報流通の改革を目指して　４　～大手出版社が考えるビッグディール後の契約モデル～」

－1月18日（火） 東京大学鉄門記念講堂　国立大学図書館協会シンポジウム

【開会挨拶】
古田元夫氏：　国立大学図書館協会会長，東京大学附属図書館館長・教授

【学術情報流通改革検討特別委員会からの報告】
今年度の活動：　①出版社協議　②新たな契約モデルの検討　③CLOCKSSへの参画　④バックファイルの戦略的・体系的整備　⑤コンソーシアム連携 (JANUL+PULC+NII)
今後の活動：　新コンソーシアムの活動の反映と、購読料に依らない新たな費用負担モデルへの対応
（尾城孝一氏：　学術情報流通改革検討特別委員会委員、東京大学附属図書館情報管理課長）

シュプリンガー社

【Springer’s roadmap】

エルゼビア社

【Business Model Evolution: Update and Discussion】

大手出版社3社はいずれも、顧客のニーズに対応できる柔軟性を追求したモデルを構想中とのことでしたが、提案までにはまだ時間がかかるようでした。

ワイリー社

【JANUL Update : Possible Journal Business Models for the Future】

【国立大学図書館関係者のみによるフリーディスカッション】

その後のフリーディスカッションでは、新モデルが顧客のニーズを真に満たすものであるのか疑問視する声や、価格の上昇への対応を依然として心配する声が上がりました。
新コンソーシアムの活動に期待しつつ、研究者や図書館の担当者一人ひとりが、この学術情報流通システムの機能不全の問題を自分自身の問題ととらえて、共に考えていくことが不可欠であると感じました。

あなたのお仕事何ですか？

国立国会図書館が提供する新たな検索サービスである、「国立国会図書館サーチ（開発版）」の企画、開発、運用を担当しています。

「国立国会図書館サーチ（開発版）」は、国立国会図書館が所蔵する図書の全てを探すことができるほか、都道府県立図書館、政令指定都市の市立図書館の蔵書、国立国会図書館デジタルアーカイブポータル（PORTA）が収録している各種のデジタル情報も探すことができるシステムです。情報の形態あるいは入手条件を問わず、大量の情報の中から利用者が求めるものに迅速かつ的確にアクセスできるようにするサービスを目指しています。

小澤弘太さん

国立国会図書館
総務部 情報システム課
主査兼システム第一係長
（情報探索サービス担当）

Q 仕事をして良かったと思うことは？

「国立国会図書館サーチ（開発版）」には、一般利用者、図書館員、各種のWebサービスを展開している方など、様々な方々からの反響をいただいています。もちろんまだ「開発版」ということもあり、機能等で至らない点もありますので、厳しいご意見もあるのですが、概ね好評をいただいています。中でも、「『国立国会図書館サーチ（開発版）』を使ったことで、国立国会図書館とはどのような機関で、どのような資料を所蔵しているのか初めて知った」というご意見をいただいた時には喜びを感じます。当館に対する認知度を向上させることも、「国立国会図書館サーチ」を開発した目的の一つでしたから。

Q 苦労していることは？

館内外の様々な立場の方から、「『国立国会図書館サーチ』はこうあるべきだ・こうして欲しい」というご意見をいただいています。それは非常にありがたいことなのですが、当然、立場によって「国立国会図書館サーチ」に対する要望は異なり、それらは相互に矛盾することもあります。そのような場合に、どのご意見を取り入れるかを決定するのには難しさを感じています。

Q 今後の展望は？

海外機関や、大学図書館、専門図書館等、まだ十分連携が取れているとは言えない各種の機関とのシステム間連携を拡大したいと考えています。関係機関の方から、「国立国会図書館サーチ」をAPI連携により利用したい、という問い合わせはすでに何件かいただいていますが、メタデータを提供していただく機関をさらに充実させることによって、連携先としての魅力を増し、そのような事例をもっと増やしていきたいと考えています。

Q リポジトリ・OAの活動についてひとこと

いずれも、アカデミズム外の方にとっての学術情報へのアクセスを容易にしたという点で、すばらしい取り組みであると考えています。学術情報の一般の世界にとっての有用性が認知され、ビジネス等様々な局面で活用されることは、学術機関、一般利用者の双方にとって大きなプラスであると思います。「国立国会図書館サーチ（開発版）」も、それらとの連携により、学術情報へのアクセスの拡大に貢献できればと考えています。

次号予告

【特集1】月刊DRF一周年記念　本誌もめでたく一周年を迎えます。読者の皆様の声、IR関係者の声…、みなさまの声で特集を組みます！

【特集2】イベント報告　SPARC Japanセミナー、DRFtech-Asahikawa、ほか

編集後記　予告内容と若干異なる誌面となりましたこと、お詫び申し上げます。
今回はデザインにこだわってみました。印象的な号になりましたでしょうか？ご感想、お待ちしています。（かずまゆ）